

文／写真：藤倉 有子(日本エステティック協会 会員・パリ在住)



会場となったトゥール市役所

日本エステティック協会のソシオエステティシャン養成に支援していただいているCODES（フランス・トゥール市）。そのCODESの30周年アニバーサリーが10月31日にフランス・トゥールで開催されました。会場は、トゥール市役所内のメインサロン。昨年亡くなられたCODESの創設者のルジエール女史の追悼もかね、盛大におこなわれました。

午前中は、ソシオエステティシャン同士

の交流の場が設けられ、各分野で活躍しているCODES卒業生が、後輩に経験を語つたりアドバイスをしたり、また後輩からの質問に対しても丁寧に答えるなどしていました。印象的だったのは、分野が違つてもほとんどの卒業生が、口をそろえて後輩に言つていたアドバイス。それは、ソシオオエステティシャンはサロンエステティシャンとはあきらかに違う職種であり、施術が異なるということです。たとえば、肌の洗顔を軽く行うことはあっても、キッショングやスチームなどの器具は使用せず、筆さえも使用しません。モデラージュの時間は短く、手技をたくさん入れず、タッピングやパンスマッポンも行ないません。デコルテまでの施術も行わないのが一般的だということです。それに対して、患者さんに安心感を与える、心を開かせるための手や背中をゆつくりするマッサージは重要で、アロマの香りや音楽を使わず、〈手〉のみが伝えるリラクゼーション法を行うこと。仕上がりは、パックよりも、軽いメイクや口紅をさしてあげることなどを大事にしているそうです。また、患者さんに対して、エステティシャンひとりで接するのではなく、心理カウンセラーなどのスタッフとのチームワークが大切であることなどを聞くことができました。

午前中は、ソシオエステティシャン同士



CODES新校長マリーオードゥ女史と日本エステティック協会 久米ソシオエステティック委員長

お昼は、初代校長ルジエール女史のソシオエステに対する情熱、人柄も含めて、女史のDNAともいわれているCODESとその30年の歩みについて、女史を支えた

スタッフたちが語った追悼ビデオが上映され、その後、現在の先生やスタッフ、卒業生や現役生、卒業したてのソシオエステティシャン全員と立食パーティーが設けられました。途中、CODES 30周年を記念して、CODESを支えるパートナー企業のかたがたから、大きなバースディケーキと長いロウソクが届けられるという嬉しいサプライズもあり、会場はより一層盛り上がりました。

午後になると、ふたつの事例が紹介されました。ひとつは「乳癌患者に対するソシオエステティシャンの役目」、そして、

つぎに、癌センター会長、皮膚科、精神科などの専門の先生がたによる、「肌への施術ではなく心へ届く施術」をテーマとした、スライドとイメージビデオを利用した活動の現状と効果が紹介されました。

そして、プログラムの最後には、CODESを支えるパートナー企業の担当者

者が、これからCODESに対する希望・目標そして、ソシオエステティシャンにむけて、抱負を語ってくれました。また、パートナー企業のひとつであるロレアルが製作した、ソシオエステティックのビデオクリップが流されました。いつそうの社会貢献をめざす先生方やスタッフのみなさんの志に、参加したソシオエステティシャンも刺激を受けていました。

CODESの2代目校長マリーオードウ女史は、ルジエール女史の理念に強く共感を覚え、ロレアルに勤務しながらもみずからCODESの校長を志願し、パリとトゥールの両方を行き来する多忙な日々を過ごしながら、CODESへの情熱を注いでいるかたです。彼女は、「日本にも足を運んで日本の卒業生やまだソシオエステティック

もうひとつが「拒食症で悩んでいる女性たちに対して、お化粧に興味を持つてもらい、自己を愛するようになるための精神面のサポート」。

メイン会場となつたトゥール市役所は、パリのオルセー美術館と同じトゥール出身の建築家によって建設され、美術館並みの素晴らしい内装と壁画で知られています。天井を見上げると首が痛くなりそうな程の高さがあるこの広い会場が、大勢のソシオエステティシャン達の熱意で、狭く暑く感じられた眩しい1日でした。

やCODESについてよく知らない日本の方々に私たちの理念をしつかり伝えて行きたい」と語っていました。

